

木田城関連年表

鎌倉時代

1327(嘉暦 2) 荒尾宗顕の名が史料に登場(荒尾宗顕譲状・妙興寺文書)

室町時代

1350(観応元) 荒尾泰隆の名が史料に登場(荒尾泰隆寄進状・妙興寺文書)

1444~1512 奉公衆の中に荒尾小太郎の名がみられる。

戦国時代

初め頃 荒尾空善が木田城を居城とし、荒尾谷を所領としていたとの記録が残る。

※遅くともこの頃には木田城が築城されていたようである。

1560(永禄 3) 桶狭間の戦い。荒尾空善討死(1566年没説もあり)。

1564(永禄 7) 池田輝政出生。

1566(永禄 9) 池田恒興、木田城に移り、荒尾谷 3 千貫を与えられる。

1572(元亀 3) 三方ヶ原の戦い。荒尾善久討死。

1573(天正元) 輝政(古新) 荒尾善久の遺領を相続する(恒興宛信長朱印状)。

1584(天正 12) 小牧・長久手の戦い。池田恒興、元助が戦死。輝政が遺領を継ぎ大垣城に入る。

※この頃には木田城が使われなくなっていたとみられる。

1590(天正 18) 輝政、岐阜から三河吉田城へ移る。

関連人物一覧

荒尾空善…(生年不詳~1560 没? 1566 年没説あり) 荒尾空善こたろう小太郎、荒尾小太郎とも。戦国期の荒尾氏として文献に登場する。木田城を居城とし荒尾谷 3 千貫を所領とする。今川義元の尾張侵入にともなう混乱の中で死亡したとも、桶狭間の戦いで戦死したともされる。

荒尾善次…(生年不詳~1590 没) 大野おの佐治氏の子であったが、荒尾空善の娘を嫁にとった関係から、荒尾空善死後荒尾氏の養子となり荒尾氏を継ぐ。その娘は池田恒興に嫁ぐ。

荒尾善久…(生年不詳~1572 没) 荒尾美作、木田小太郎とも。荒尾善次の子で荒尾氏を継ぐ。三方ヶ原の戦いで討死した。

善応院 …(生年不詳~1608 没) 荒尾善次の娘。池田恒興に嫁ぎ、元助、輝政はじめ 5 男 4 女を産む。

池田恒興…(1536 生~1584 没) 勝入、勝三郎とも。父は池田恒利、母は養徳院(信長の乳母)。織田家の重臣であったが小牧・長久手の戦いで長男元助と共に戦死。

池田輝政…(1563 生~1613 没) 幼名古新、初め照政、三左衛門とも。池田恒興の次男。信長、秀吉に仕え、小牧・長久手の戦いで父、兄共に討死したため、家督を継ぐ。秀吉に重用されつつも、徳川家康の娘(督姫)を嫁に迎えたことから家康からも重んじられ、秀吉死後は家康に仕える。関ヶ原の戦い後は播磨を治め、現在の姫路城を築城する。

参考文献

『東海市史』資料編第 1 巻 1971 東海市

『東海市史』通史編 1990 東海市

『愛知県中世城館調査報告Ⅳ(知多地区)』 1998 愛知県教育委員会

『天下人の書状をよむ 岡山藩池田家文書』 2013 岡山大学附属図書館・林原美術館編 吉川弘文館

『信長・秀吉・家康と美濃池田家一大御乳・池田恒興・輝政の戦いー』岐阜県博物館平成 30 年度特別展図録 2018 岐阜県博物館

木田城跡紹介リーフレット 2022.01 発行

東海市教育委員会 社会教育課 〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目 1 番地 電話 052-603-2211(代)



木田城跡とは

木田城は、知多半島の付け根に位置する愛知県東海市の海岸沿いに広がる平地を臨む丘陵地にあった城で、荒尾氏によって築かれたとされ、池田恒興やその子池田輝政ともかかわりの深い城です。現在は宅地化が進んでいますが、わずかにその痕跡を残しています。



木田城跡の位置

木田城の歴史

○木田城の成立

木田城がいつ築かれたかはよく分かっていませんが、江戸時代の地誌などによると、城主に荒尾空善の名が見られることから、16世紀中ごろの戦国時代には存在していたと考えられます。ただし、周辺には中世の遺跡が数多く存在しており、過去の発掘調査では集落と性格が異なる室町時代以前の遺構などが見つかっています。木田城の成立時期を考える一つの材料となりそうです。

○城主の移り変わり

荒尾氏によって築かれた後、代々荒尾氏の城でした。文献に残る城主としては荒尾空善、善次、善久の名が見られます。善久が戦死したことから、姻戚関係にあった池田氏が旧領を引き継ぎます。城主は池田恒興とされますが、後に輝政が城主になったという伝承もあります。その後、池田氏の領地替えにともなって木田城は廃城となったようで、江戸時代を通じて宅地化が進んだようです。

木田城のすがた

○なぜ木田城は築かれたのか

木田城が立地する丘陵地は、西側に海岸平地が広がり、北側は河川が流れ、周囲に高い丘陵がないことから中世の城を築く上では条件に恵まれた場所でした。さらに当時は河川を利用した物流がおこなわれており、交通の要衝でもあることから城が築かれたと考えられます。



近世に描かれた木田城
図版出典 『東海市史 別編』

○記録に残る木田城

天保12年(1841)の村絵図には、木田城の位置が「古城跡」として描かれており、当時は畑であったようです。また、県内の中世城館跡を調査した『愛知県中世城館調査報告』(1998)には、こうした絵図などをもとにしたとみられる縄張り図が示されています。

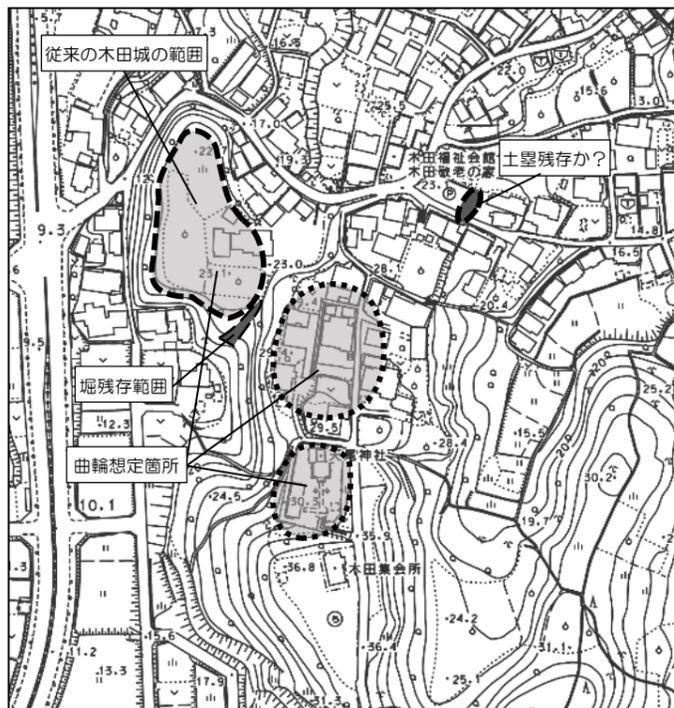


調査報告掲載の縄張り図
図版出典 『愛知県中世城館調査報告Ⅳ』

○ありし日の木田城のすがた

木田城周辺は、宅地であるため現在はほとんど城跡が残っていませんが、一般的な中世城館の様子を地形に当てはめて考えると、これまで城跡とされてきた場所を含めた広い範囲が城跡であったと考えられます。

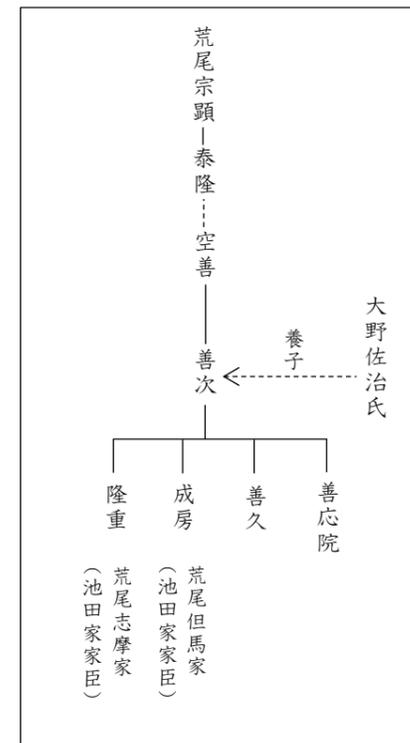
中世の城跡では地形を巧みに利用して複数の「曲輪」と呼ばれる防衛施設を設けますが、本丸(主郭)は標高が最も高い場所であることが一般的です。木田城では天尾神社のあたりが最高所となることから、この場所が本丸であった可能性があり、階段状に曲輪が重なっていたと想定できます。周辺にも土塁や堀などが存在していたと予想され、丘陵の大部分が城であったと考えられます。



木田城の遺構と想定範囲

荒尾氏とは

荒尾氏は現在の東海市荒尾町から出た、鎌倉時代から続く武士でした。鎌倉時代には尾張における有力な御家人でしたが、室町時代以後は次第に勢力を弱めていったようです。戦国時代に入ると荒尾空善という人物が文献に登場します。空善は水野氏や織田氏の配下となり、木田城を中心に荒尾家の復興を図ります。しかし、桶狭間の戦い(1560年)で有名な今川義元の尾張侵攻による混乱の中で戦死してしまい、大野(現在の常滑市)の佐治氏から養子としてきた善次が跡を継ぎます。その後、善次の娘(善応院)の婿であった池田恒興が織田信長の命で木田城へ入り、荒尾氏は池田家へ仕えることになっていきます。さらに、善次の次の当主となった善久も三方ヶ原の戦い(1572年)で命を落とします。立て続けに当主を失ってしまった荒尾氏は、その後池田家に付き従い領地を移り、木田城を離れました。後に荒尾氏は2つの系譜に分かれ、鳥取池田家の重臣として江戸時代を通じて池田家を支え続けました。

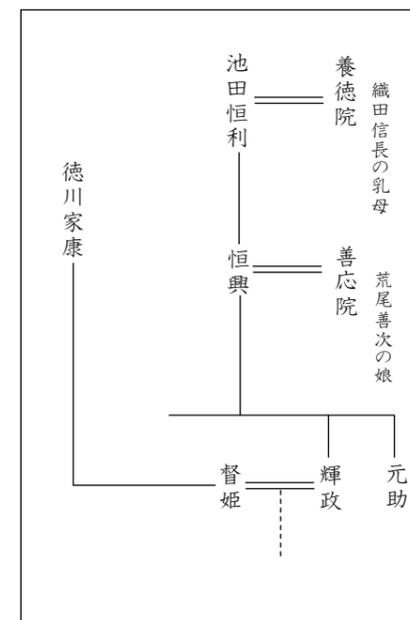


荒尾氏系図

池田氏とは

池田氏は織田家に仕える武将として文献に登場します。そのルーツは大阪府池田市とも、岐阜県池田町であったともされます。池田恒興の母(養徳院)は織田信長の乳母をつとめたことから、同世代であった恒興は信長に重用されます。恒興の妻は荒尾善次の娘(善応院)でした。桶狭間の戦いの後、信長の命で恒興は木田城に入り、荒尾氏を家臣に加えていきます。

三方ヶ原の戦いにおいて荒尾家当主の善久が戦死した後、その遺領は織田信長の命でわずか10歳の池田輝政(古新)がおさめることとなります。本能寺の変(1582年)以後も織田家の有力武将でしたが、小牧・長久手の戦い(1584年)において秀吉方についた恒興は長男元助と共に戦死してしまったため、次男の輝政が家督を継ぎます。輝政は豊臣秀吉、徳川家康それぞれから重用され、西国一の大大名と呼ばれました。その後池田家は紆余曲折がありながらも江戸時代を通じて代々続きました。



池田氏系図(部分)